

アイヌ民族の国土創生神話

アイヌ民族の伝承では、既に存在していた天の至上神が国造りの神を下界に使わし、大地を造り、次に動植物、最後には人間をつくったことになっています。この国造りの神はモシリカカムイ（モシリ



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレール国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレール校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

moshir-国 カラ kar-を作る カムイ kamuy-神)、コタンカラカムイ(コタン kotan-集落・村 カラ kar-を作る カムイ kamuy-神)など様々な名前と呼ばれています。その後に、姿かたちは人間、能力は神というアエオイナカムイ(ア a-我々が エ e-それ(業績) オイナ oyna-伝承する カムイ kamuy-神)、アイヌラックル(アイヌ aynu-人間 ラク rak-らしい クル kur-人)、オキクルミ、サマイウンクルなどといわれる人文神が登場し、人間にあらゆる知識や技術、社会での生き方、物の考え方を授けたといわれます。ずいぶん沢山の神様がいますが同じ神々を異なる名称で呼んでいるためです。

アイヌ民族の国造りに関するユーカラに、ヒバリが舞い上がったと思うと急降下するわけが語られているものがあります。ヒバリのアイヌ語名、リクンカムイ(リク rik-高み ウン un-にいる カムイ kamuy-神)またはリコチリポカムイ(リク rik-高み o-にいる チリ cir-鳥 ポ po-っ子の カムイ kamuy-神)といいますが、国造りの神の手で国造りが仕上がったとき、天上界にいたヒバリは、下界で人々が暮らせるか否かを視察して報告するよう、天界の神々から命じられました。そこで、ヒバリが下界に降りてみると、それは美しい自然に恵まれた国土ができ上がっていました。あまりの美しさに、ヒバリは本来の仕事を忘れ、あちこち見物するなどして遊びまわっていたため、天に戻っても本来の任務

であった視察報告がろくにできませんでした。神々はヒバリの怠慢を厳しく咎め、ついには天上界から追放してしまったそうです。このため、今でもヒバリは天に帰ろうと飛び立ちますが、追放されたこ

とを思い出して急降下するというのです。

オオジシギについても同じようなお話が伝えられています。オオジシギは春先急降下するときに、風切り羽を利用して雷のような大きな羽音をたてるので、カミナリシギとも呼ばれます。アイヌ語名は、鳴き声がチピヤックと聞こえることからチピヤックカムイと呼ばれています。オオジシギはオーストラリアが居住地で、春になると北日本(北海道や南樺太、南千島)に飛来して営巣し、子どもとともに夏の終わりにはオーストラリアに戻って越冬するのですが、オーストラリアにいる間は全く音もたてずに静かに暮らしているそうです。生物学的には、日本に来ると、昔天から追い出されたことを思い出すわけではなく、春に子育てをするので、音をたてて急降下するのは雄の雌への求愛行動とも縄張宣言だともいわれます。

ヒバリやオオジシギのお話からもわかるように、アイヌの人々は動物や植物の生態を非常に注意深く観察し、各々の生物の個性的な生き様・暮らし方を、来る季節への生活様式の変更を人に告知するものとしてとらえていました。忙しい現代に生きる私たちは、ただ鳥がいる、美しい花があるとして見るだけですが、生物をその生き生きとした物語とともに捉え、関わる生活は、生物の数だけ人間以外の世界があるのと同じで、非常に多彩で楽しいものであったであろうことは想像に難しくありません。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~12』(北海道教育委員会、2008~2021年)等。